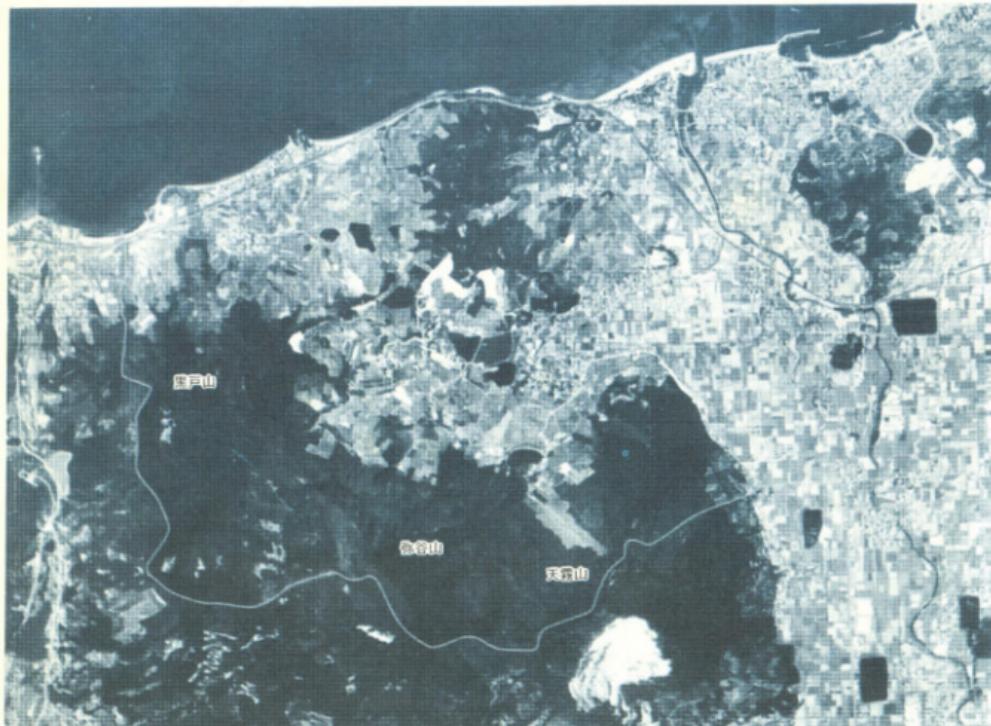


天霧城跡

香川県善通寺市・多度津町・三野町にまたがる中世山城跡





弥谷山山系 左から天霧山・弥谷山・黒戸山・白方山（多度津町奥白方より）



1. 天霧城跡 香川氏の要城（話の城）。

2. 本台山城跡 香川氏の居館跡。多度津城ともいいう。現施設公園の丘陵地一帯とされ、石垣、土塁の一部や古井戸が残る。また「本台」、「城下」の古地名がある。

3. 貴峰山城跡 全歴史に「藤田四郎入道宗源、之を堅けり。…後並に綾景利と云う者あり」と記される。標高222mの山頂部三段の構えに残っている4ヶ所の削平地がある。

4. 甲山城跡 香川氏の出城。全歴史に「朝日奈彌太郎之を堅けり。蓋し朝日奈三郎義秀の裔なり、岡内脇力入を兼ねたり。香川（川）氏の廬下なり」とある。74番札所甲山守裏手の標高80余の甲山山頂部を中心に五～六段の削平地がある。

5. 廃臼山城跡 香川氏の出城。西讃府志の御遺見便案内標によると飛田伯耆守、また香川伊賀守がここに拠ったという。大和山北麓にある丘陵地御臼山には現在確かな城跡には見られない。

6. 中村城跡 全歴史に「仲行司貞房居之」（星島の城で源氏に組す）とあり、また「後世有行司浦左衛門 罷居之」とも記されている。善通寺市中村町宮東に方形結構を想定せしめる土塁・濠跡の一部が残る。

7. 金倉城跡 京兆氏の旗下金倉頼忠（鬼中津の称あり）の居城跡。香川氏と所領にからんで対立。天文3（1575）年香川・香西・福家・羽柴氏らに攻められて落城。城跡は丸龟市金倉町円龍寺・西教寺境内、あるいは中津町中の村周辺とされる。



天霧城跡遠景（多度津町青木より）

天霧山は、内海に臨む屏風のような弥谷山山系の北東部に一段高まる山塊である。その標高382m～360mにかけての山頂部から、東・北東・北方に向けて短い尾根が下る。南西側は最高所より急に下がって二つの小さな高まりがあり、弥谷山との鞍部に至る。山の周囲は急崖急坂の斜面で、金山自然の要害地形をなしている。また眼下に丸龜平野を收め、南西方面に三農平野を、北方には多度津・白方の海岸線から内海の広がりまで遠望することができる。實に、天霧山は天險の地形に加えて、陸海どの方面的動向にも十分に対応できるという地理的な好条件

を備えている。城主香川氏の居館本台山城とも速やかに連絡が取れる立地であり、香川氏が有事に備える城地（詰の城）を天霧山に求めたことは、まことに当を得ているといえよう。

城跡は山頂部及び派出した尾根上に所在し、その城構えは山頂部を中心に各尾根の郭群（遺構中の削平地を郭と呼ぶ）が巧みに結びつき、全体的にまとまりをもって各方面への防備ができるように配慮されている。

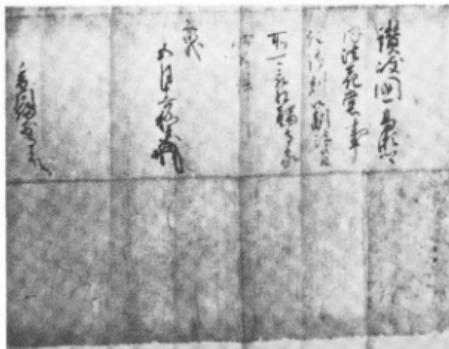


弥谷山山系と天霧城跡

城主香川氏

香川氏は、相模国香川荘の出身で鎌倉権五郎景政の後裔であるという。14世紀半ば過ぎに讃岐の守護細川氏に従って入部し、多度津本台山に居館を構え、天籠山に詰の城を築いて西讃地方に勢力を広げていった。その嫡流の系譜について、諸文献を検討した『善通寺市史』では「頼景一和景一満景一元景一之景一親政」としている。

応永7年(1400)頃に西讃の守護代としての地位を得ており、明応2年(1493)頃には讃岐13郡のうち西讃6郡を領有するようになった。時に、阿波三好氏が長慶以来急速に勢力を伸ばし、讃岐をも併領しようと動き出した。永禄元年(1558)9月長慶の弟実体は阿波・東讃の連合軍を率いて丸龜平野に進み、善通寺を本陣として天籠城攻略にかかった。しかし、香川氏は寡兵ながら要害無比の城を利して動ぜず、ついに三好方の派遣した香西氏の仲介で和議を結んだ。降って、天正6年(1578)土佐長宗我部元親の讃岐侵攻が始まり、香川氏属城の藤目城(観音寺市)・本籠城(三豊郡財田町)などが相次いで落城。翌7年、香川氏は降伏勧告を受けて、元親の二男親政を養子に迎え世嗣とした。以後、香川氏は長宗我部の庇護下に数年を経るが、天正13年(1585)豊臣秀吉の四国征伐により元親が降伏すると土佐へ退いた。牙城の天籠城も主を失い、荒廃の途をたどることになった。



香川和景書状 文明2年(1470)

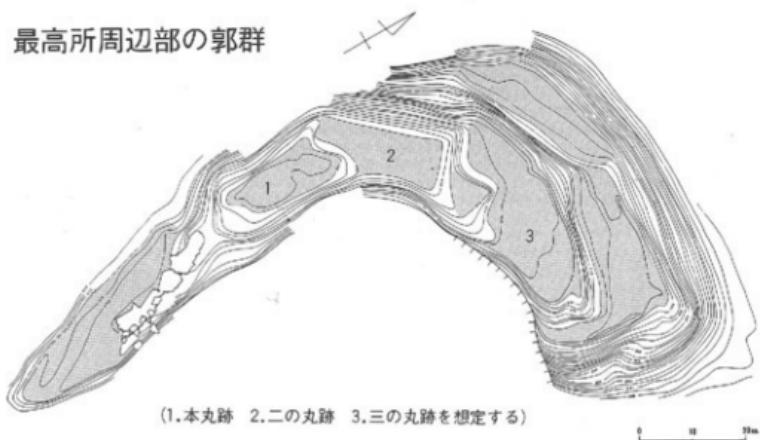


香川元景書状 天文6年(1537)



香川之景書状 永禄元年(1558)

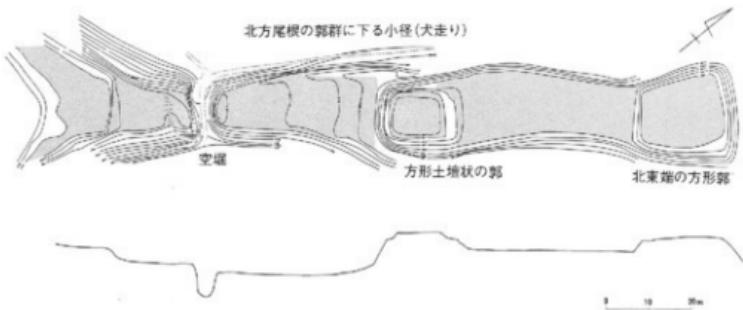
最高所周辺部の郭群



馬背状の尾根が続く山頂部

山頂部は最高所から北東に向けて低下する馬背状尾根が続くが、その狭長な地形を階段状に削平して郭を連ねている。最高所の削平地は俗に「モノミダイ」の称があり、他を十分に統御し得る展望を有し本丸跡と思われる。北東側に長方形の郭（二の丸跡か）がくの字状に付き、さらに一段小郭を配した下方にやや大きめの郭（三の丸跡か）を置き、それを二段の腰郭が囲む。そして、高い切岸を伴う郭と長方形の郭を続けて空堀に下る。このように最高所周辺部の郭群は相互に寄りかかって連接する、いわゆる梯郭式の構造をとる。さて、最高所南側には巨大な露岩と不整形な郭があって、下方は「犬返しの陥地」と呼ばれる急坂となる。それより弥谷山との鞍部に至る稜線部にも6郭があり、背面の備えは十分である。

空堀及び外郭部 (下記は地形断面図)



空堀は尾根最狭所を幅5m・深さ3m余にわたって切断する「切通し空堀」ともいるべきもので、山頂部の郭群を二分する形をとる。その堀底から北方尾根の郭群や南西側の犬返し直下に通じる小径が走る。これより細かい郭・土壇状の小郭・細長い郭が並んで山頂部北東端の方形郭（標高360m）に達する。この直線的な4郭の並びに変化をつけているのが方形土壇状の郭である。前面の郭と2m、背後の郭とは5mに及ぶ段差を設けて前後の変化をより大きく見せている。そして、北東端方形郭を起点に東・北方の尾根上に階段状の郭群が延びる。

このような山頂部の郭群の在り方からみて、空堀より北東端方面が外郭（前衛部）、最高所に向って内部（主要部）を構成していたものと思われる。北東端の郭は尾根分岐点にあたり、まさに外郭部の要となった所であろう。各尾根の郭群は外郭部の広がりを示し、「外郭線の守り」を固めるものである。



左・山頂部の内郭と外郭を分ける空堀
左・空堀から北方尾根の郭群に下る小径

北方尾根の郭群



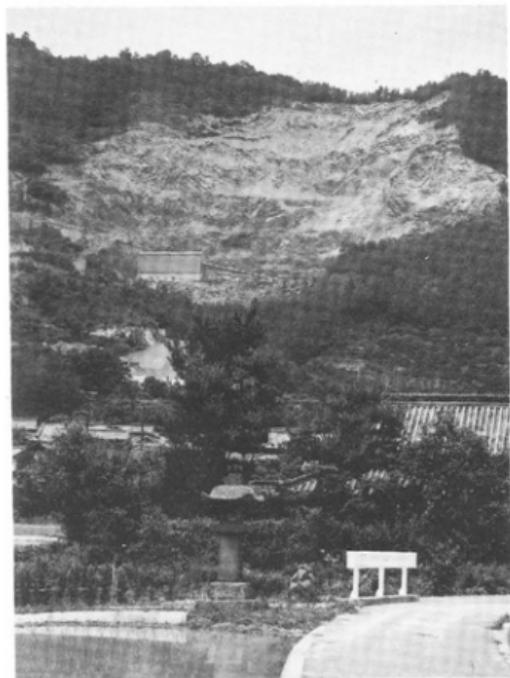
山頂部北東端より北方尾根を望む



北方尾根二段構えの郭

北方尾根の標高320mあたりまでに10郭、下つて295m～280mに3郭、280m～275mの尾根先端部に4郭が並ぶ。そのうち、狭い岩場地形を少し下った北東方尾根の分岐地点には、尾根筋の郭と東側直下を掘削した細長い腰郭とによる見事な二段構えが見られる。また、尾根筋の小さな鞍部を経た先端部は、頂部に隅丸方形状の郭が造られ、それを防護するように南・北側に小郭が付属している。

北東方向に低下する尾根筋にも、大小15郭が階段状に連続する。上方に4郭、次いで標高200mあたりまでに8郭、尾根取り付き部に3郭がある。北東麓の吉原町東碑殿から尾根南側の谷沢を登る小径があり、北方尾根二段構えの郭に連絡する。なお、それより谷沢の斜面を上り気味に南へ横切ると東方尾根の第8郭に達する。



山頂部に迫る栗石採掘

城跡は、南麓の普通寺市吉原町で昭和43年頃から始まった栗石採掘作業が年々拡張され、大きく山腹がえぐり取られるにつれて重大な影響を受けるようになった。このため、県教育委員会及び一市二町天霧城跡保存会は保存運動を進める一方で、昭和49年と52年に城跡重要部分の測量調査を行い、造構の全体的な把握に努めた。これによって城跡の大規模な構造形式（縄張り）が判明するに従い、一層その評価が高まつたにもかかわらず、栗石採掘は山頂部にも迫る勢いをみせ、ついに東方尾根の3～4郭が半壊以上の状態に陥った。さすがの天霧城も「採石」というかつてない強敵に脅かされ、落城の危機に直面している。



栗石採掘でえぐり取られた東方尾根

東方尾根郭群の発掘調査

天霧城跡は、昭和52年12月に国の文化財保護審議会より「中世山城の縄張り跡をよく止めている」と高く評価され、史跡指定の答申を受けた。しかし、その後も栗石探査作業に伴う東方尾根の郭群の崩壊が進み、かつての要害堅固な城砦の景観が大きく損われていった。ここに、県教育委員会・保存会・探査業者の三者協議が重ねられ、昭和56年4月から8月にかけて東方尾根の郭群についての全面的な発掘調査が実施された。

東方尾根には、標高305mの先端部までに大小11ヶ所の郭が並んでいた。その間約250m、比高差55mほどで、尾根筋の半ばで傾斜が変換する。なお、南麓の東西神社から山頂部に至る小径がこの尾根筋に通じている。調査は、北東端方形郭の下方斜面にある三段の小郭を除く8郭について行われた。便宜上、先端部の郭より上手に向って順次第1・2…8郭と呼び、各郭の概況をたどることにする。いずれも規模・形態・付属施設等において特徴点をもち、單に尾根筋に削平地を連ねたというものではない。



東方尾根先端部の発掘

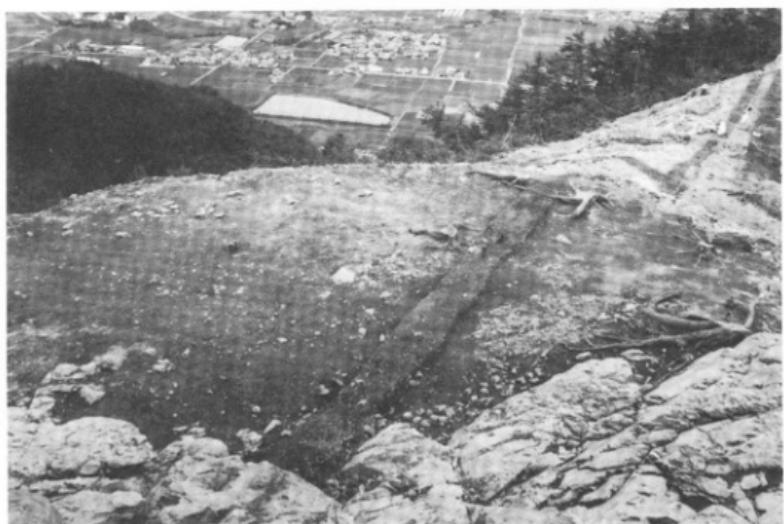


東方尾根全景（発掘調査区域）

東方尾根上手の郭群



第8郭は尾根筋及び北側斜面を大きく掘削して平坦部を確保したもので、明らかに丸龜平野の中央部を志向する在り方である。郭の周囲には多角形状に石垣を巡らし、前面を堅固にしている。北側に少し下がって方形の小区画が付属し、そこから第7郭との斜面中ほどにある細長い小平坦部まで通路が下る。第7郭の周辺はやや緩い斜面となるためか、土止め用の石垣を設けていない。郭の西半部は破碎礫を敷設して一段高い。下方で尾根筋の傾斜が変換するが、そのあたりから栗石採掘に伴う郭配置部の損壊が著しくなる。傾斜変換地点には浅い堀切りとその前面に石壘が造られている。堀切りから北西方向に通路が延びる。石壘の北端部は二段の石垣で角取りし、石壘に接した第6郭の北側縁も石垣固めである。長方形の第6郭北東隅から第5郭に向けて低い石壘が伸びている。その断面は台形を呈し、地山整形の上部に破碎礫を積み上げたもので、残りがよい。また、石壘上に柵列でも存在していたのか、根石様の配石が認められた。第5郭では、石壘と背面切岸に沿ってL字状に配列した礎石が検出された。東西10石、南北6石が見られ、礎石間隔は1mほどである。ただ、郭の南部が既に削除されており、南北方向の礎石数や南側の礎石列がどうなっていたのかは不明。東側の礎石列も移動その他で消失しているのかもしれない。



第8 郭の平坦部



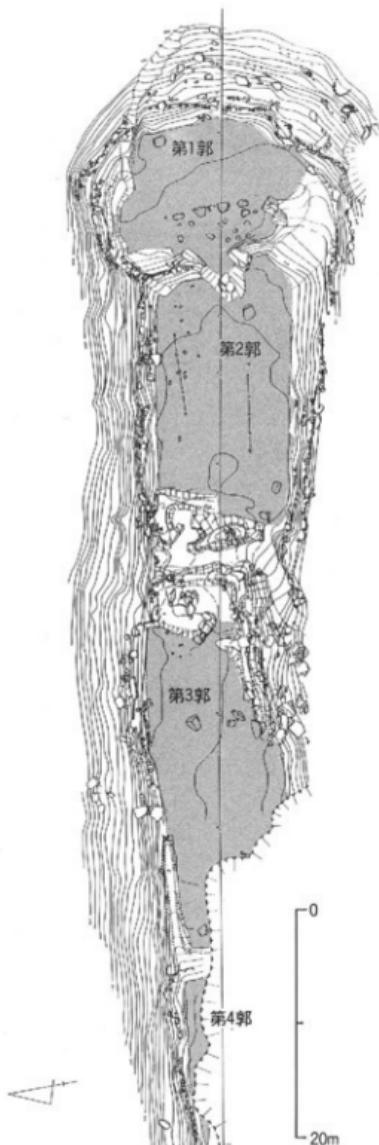
第8 郭北側の石垣



第6 郭背後の石壁と浅い堀切り

東方尾根先端部の郭群

第4郭は、かろうじて北側部分を残す状態である。第3郭との北側連接部に第5郭で見られたと同様な低い石塁が伸びる。第3郭も南西部をえぐり取られていた。ほとんど高低差のない第2郭とは堀切りで区分される。堀切りの両側には相対応するように樹形状の石塁が設けられている。ここでも塁上に柵様のものが付設されていたのであろう。そうすると迷路のように石塁・堀切り・石塁と経て、両郭が通じることになる。堀切りには南麓からの「うま道」が通じていたと伝えられるが、採石のため取り付き部分しか残っていない。第2郭の南・北寄りに東西方向の各5石からなる礎石列が存在した。先端の第1郭は半円形を呈し、地山掘削で前面に急斜面を造り出している。周囲の斜面部に礫土を留める石垣が多角形状に積まれ、頑丈な構えを見せる。第2郭との切岸中央に大きな露岩が2つあり、その間に柵状の石が置かれ、前面には礎石様の4石が並ぶ。周辺から近・現代の瓦片・漆喰・寛永通宝などが出土し、後世の何等かの施設があったことを物語る。南部に第2郭へ上がる緩斜面が造られ、北部に第2郭から石塁が下がる。さて、各郭の造成では基底部に石積みを施して礫土を留め、石塁部分で岩盤を利用するなど、事前の縄張りが綿密に行われていたことを窺わせる。第2・5郭の礎石列も建物遺構として注目される。





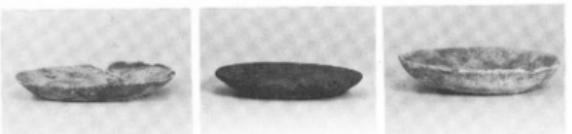
東方尾根の先端部



第2 郭南斜面の石積み

出土遺物

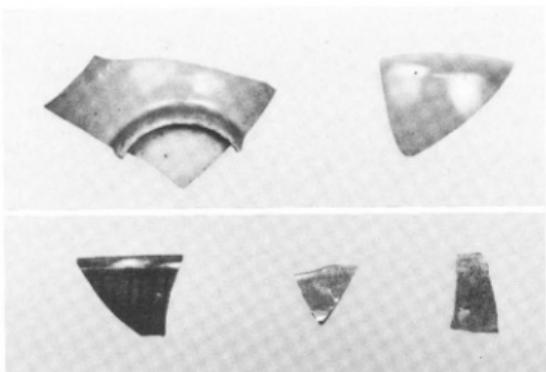
東方尾根第2・3郭の北側斜面を中心とし土師質土器（皿・壺・塊・鍋・擂鉢など）や輸入陶磁器（青磁・白磁・染付）が相当数出土した。土器類では皿・壺が多く、それらの成形時の底部切り離しに回転ヘラ切りと静止糸切りの2種が見られる。鐵・刀子・切羽・鉄鍋・釘なども出土している。鐵はすべて先端がふたまたに開く雁股鐵。釘は第1～8郭にわたって多量に出土し、礎石列とともに建築物が存在した可能性を大きくさせる。なお、開元通宝から寛永通宝まで32種・142枚の銅錢が出土した。その大半は北宋錢が占める。これらの出土遺物が示す年代は、およそ15～16世紀であろう。東方尾根の郭群が、その時期には築造され、機能していたことが考えられる。



土師質土器の皿



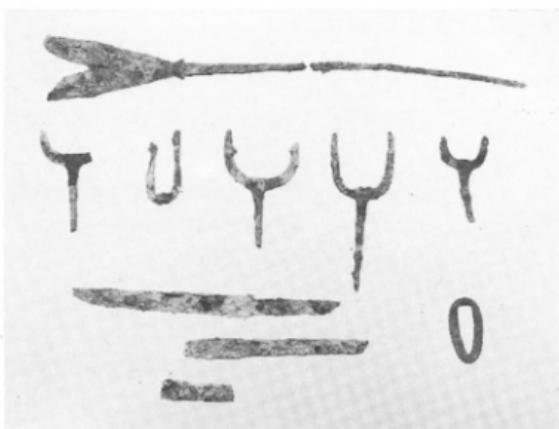
土師質土器の壺



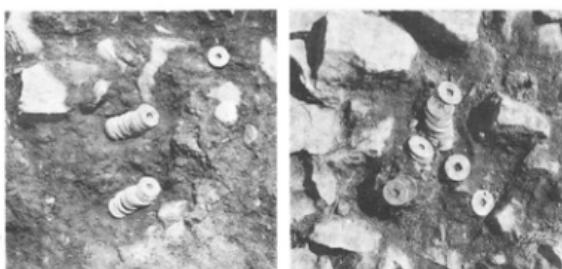
青磁など



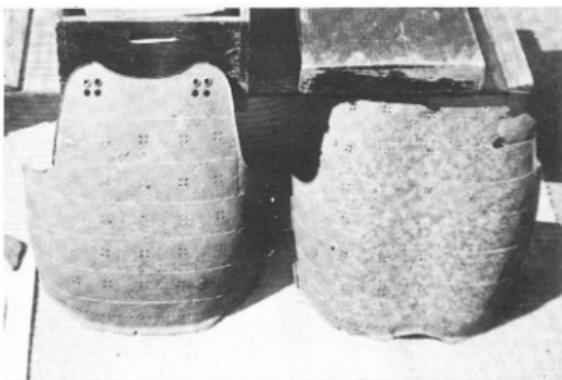
染付（内面）



雁股鉤・刀子・切羽



紐通しのままで埋もれたと思われる銅錢



城跡出土と伝えられる
甲冑残片

(多度津町奥白方

山地忠敬氏蔵)

菱綴の二枚胴残片で
写真左の前胴と右の
後胴とは別組みであ
るという。

讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡

天霧城跡では、最高所から次第に低下する階段状の郭群が北東方面に延びて、この方面に対する城構えが十分にとられている。これに対して弥谷山との鞍部に向う南西方面の郭群は犬返しの陥地を隔てて存在し、主要部の背後を守備する立地となっている。この点、最高所から北東方面を大手、南西方面を搦手として考えることができる。城構えの主要部、即ち内郭は梯郭式の縄張りをとり、内・外郭は空堀によって区分される。空堀は地形的にも縄張り上からも絶好の地点に位置して、内郭防備の効率を一段と高めている。北東端の郭を要とする大手方面外郭部の守りの広さ・堅固さにも注目される。それらは主要部を幾重にも防備し得る態勢をとっている。それが天霧山に備わる立地条件や天陥の地形と相まって優れて要害堅固な天霧山城を成立させているのである。こうしたことは東方尾根の発掘調査によって一層明らかになった。現われた郭群の雄大さもさることながら、要所に堀切り・石壠等を施す細かい配慮も行き届いている。

城跡の縄張りや造作状況は、従来言られてきたように戦国時代末頃（16世紀後半）に該当するものであるが、多くの中世山城と同様に一時期の築城ではなく、必要に応じて拡張・増強してきたものであろう。東方尾根の郭群に限って言うなら、15～16世紀の築造年代が考えられるわけである。さて、この貴重な城跡保存のために県及び関係市町・保存会などが精力的な取り組みをしてきたわけであるが、一部は無残にも崩壊が進んでいる。現在、国指定史跡としての答申を得て、いち早く正式指定となる「官報告示」が待たれる段階にある。



東方尾根から丸亀平野を望む



天霧城跡に学ぶ多度津町文化財少年団

本書に掲載した図版・写真等について、香川県教育委員会及び多度津町・加々見平八郎氏から格別のご協力をいただいた。記して深く感謝の意を表します。

天霧城跡

昭和58年12月1日発行

執筆・編集 秋山 忠

発 行 一市二町天霧城跡保存会

香川県仲多度郡多度津町采町1-1-91
多度津町教育委員会内

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-12-2



空堀内壁の石積み